

宇宙とUFO・国際シンポジウムin羽咋



最終日の共同声明発表の様子。(羽咋市民体育館にて)
声明には、各出席者のサインが入れられ、代表として
元スカイラブ4号船長・ジェラルド・カー博士が行った



本文は、ロキッチュ氏のメモと記憶に基づいて構成されたものです。

石川県羽咋市で「宇宙とUFO
国際シンポジウム」が開かれると
いう情報を得たロキッチュは、早
速かの地へ旅だった。
「そうはちばん伝説」のある能
登の空の下で、ロキッチュが接近
遭遇した驚異の現実とは？
ついに、探訪シリーズはここま
で来た！

後日、羽咋市役所から送られてきた参
加案内所を見て再び驚いた。
ワシは、お祭りが濃厚なイベントと思っ
ていたのじゃが、あにはからんや、かな
り本格的なモノであった。
もつともそれは、明らかに子供向けと
大人向けに分かれるプログラムではあつ
たが、革新的じゃつたのは、このような
イベントが、市役所とはいえ、公的機関
主催のもとに開催されるという点である。
諸外国でも、民間レベルではUFOシン
ポジウムというものは割と一般的ではあるが、
公的機関主催は、多分前例が無かつたよ
うに思う。



事の起こりは、ワシが90セミコンジャ
パンへ参加すべく、千葉県の幕張駅へ降
り立った時の事じゃつた。
額を流れる汗を拭おうと、ふと立ち止
まった駅の構内の広告掲示板に、なにや
らワシの意識下に訴えかける文字列があ
る。ふと、その方向に両眼のフォーカ
スを合わせてみると・・・
「宇宙とUFO国際シンポジウムin羽咋」
という、マッドサイエンティストのマイ
ントに未知なる放射線を当てるがとき
イベントのポスターが貼られているでは
ないか！
すかさずワシはメモを取り、セミコン
会場へ急いだ。そう、羽咋市役所企画
室へ電話を掛けるために！

という、そうそうたるメンバーである。
また、海部首相も、このシンポに向け
てメッセージを送られた。
曰く、「・・・UFO問題について、そ
ろそろ現実問題として取り上げても・・・
だという。これも異例といえは異例の
出来事であるう。
とにかく、そうしてワシは、何かにつ
かれたように、一路日本海・石川県羽咋
市を目指したのじゃつた。



羽咋市は、能登半島の金沢側の付け根
にあたる場所にある、漁業と観光の町で
ある。
とくに、その海岸線は千里浜といって、

なにしろ、参加者がものすごい。

アメリカ
アメリカン大学・光学専攻
ブルース・マカビー博士
元国連本部広報担当官
コールマン・フォンケビュツキー少
佐

ソ連
ソユーズUFO研究センター所長

ウラジミール・G・アジャジャ博士
全ソ婦人科学者会議議長
マリナー・L・ポボビッチ博士

台湾
台湾文化大学教授
江晃榮博士

台湾UFO学会研究委員会
張開基

日本

水産庁遠洋水産研究所

永延 幹男博士

UFOジャーナリスト

矢追 純一



A black and white photograph showing a person riding a motorcycle on a dirt road. The rider is wearing a helmet and a light-colored shirt. The road is unpaved and appears to be in a rural or undeveloped area. In the background, there are rolling hills and a cloudy sky. The overall scene suggests a journey or travel in a natural setting.

で、氏の姿を見かけたこともあるじやろう。氏が中心となり、例の「ふるさと創

ワシは、山梨県は大月市に居を構えて
 おるが、ここから日本海へ抜けるには、
 中央本線を西へ谷へ田舎

こうして、期待と緊張が高まるなかでワシの乗ったタクシーは、シンポジウム会場の入り口へ向かって、大きくカーブしていった。



のじゃという。

宇宙とUFO・国際シンポジウムin羽咋

宇宙とUFO・国際シンポジウムin羽咋

何人かの参加者がレポーターにインタビューを受けているのが見てとれた。ワシは、会場内へ8mビデオを持ち込んだが、結局使わなかった。メモと自分の脳味噌に頼ったのである。

「本場に必要情報は、集中して記憶する」方が、より効率的である事を経験的に知っているためであった。

1日目の演題は、マカビー博士の「UFO墜落とガルフブリーズ事件」、ポポビッチ博士の「宇宙開発とUFO・アゼルバイジャン墜落事件」、江博士の「中国の歴史に見るUFO」という内容であった。

講演は、1発表に対し2名の同時通訳にて、英語、ロシア語、日本語、中国語で行われていた。

1演題に対して、約1時間45分の時間を与えられていたと思う。ただし、江博士の講演は、博士自身のたどたどしい日本語に加え、記録の列挙という、日本人受けしない講演で、さすがにワシも脳波が8波に陥りそうになった。

各演題のサマリーについては、後述の記事を参照されたい。

偏見が少なくないという点で、ソ連のUFO研究のレヴエルは高い。目撃者も、UFOに対する先入観が少ないため、起こった現象を正確に報告するようじゃ。

また、ワシが「これじゃ!」と思った発表が、ポポビッチ博士の口から飛び出した。UFOの飛行原理についてである。曰く、我々の考えている場の理論に、もう一つ新しい場があるのじゃという。これは、静電場、電磁場、重力場、共振電磁場であるという。ワシも、電気工学を修めた者として、これらの妥当性には疑問も残るが、ワシがかねてから考えていた、「もみくちやにされる場」の考え方が、共振場として表現されておるではないか。

つまり、電場、磁場を高周波化していく



ニコラ・テスラ博士とテスラコイル。
テスラコイルの高周波共振機構は、
共振場・カリーナ肝と深く関わるといふ。

とき、通常のやり方では正則関数(微分可能な連続関数)しかでてこない。しかし、共振器を使い、電磁場をオーバードライブすると、電磁場が正則関数からはずれ、微分不可能・不連続な場ができるのではないか。

これこそ、かつてTMSR4号(マッドサイエンス論文集)に掲載した、「不連続空間間の物理的相互作用」に通じるところがあるやもしれん!

まさに、空間性質の変調である。また、円盤状をした重い物体を高速で回転させると、回りの物質の質量が変化するという。

このような研究もソ連では行われているのである!



んや、暖冬のため、少し歩くと汗さえ額に滲むほどである。何かを期待しつつ、夜空をながめながら宿へ向かうワシの目に、ひととき明るく輝くモノが映った。

「何じゃあれは!」

それは、ホテルとおぼしき建造物の屋上に、斜めに着陸しているかのような、UFOを型取ったネオンサインであった。

「ここまでやるか普通」

一瞬思ったが、ここは「そうはちばん伝説」の町。町ぐるみで、UFOを観光資源にしていたって不思議はない。

あんぐりと上を見続けて、そろそろ首筋も疲れてきたワシが、「さて」と視線を足元に向けた途端、

「何じゃあれは!」

なんと、お菓子屋さんのショウウィンドウのなかに、その名も「UFOショイトケーキ」という物体が鎮座ましましておるではないか!

「お菓子屋だからこりゃおかしいや」などという冗談ではすまされないう、なにが異様な意気込みを感じてしまったのは、ワシがインスピレーションの人だからじやろつか?

「空を見るより町を見る方がオモロイ」と言う訳ではないが、こうなればヤケである。ここが、どいう土地であるのか、ワシの観察眼はカメレオンのようにあたりを万遍なくサーチし始めた。宿も近づいてきた



これがUFOケーキだ! 母船と小型機がいるぞ!
しかし、見た目マズソウである。

所で、最後のチャンスとばかりに、もう一度空を見上げてみる。

「な、何じゃあそれは！」

夜空を横切って青白いビーム状のものがひらめいている。しかも、そのビームは、先ほどのシンポジウム会場のある、市街地の方角から放射されているのじゃった！

宿についてから宿泊客の話から分かったことでは、これはなんと、パチンコ屋のイルミネーションだという。

しかも、あのビームの色からすると、アルゴンレーザーであろう事は間違いない。パチンコ屋の屋上からアルゴンレーザー……

……羽咋にきて、本当によかった。



宿となる民宿についたワシは、早速今日一日の出来事を叛趣してみた。マカビー氏の発言、ポポビッチ女史の「共振場」の話……

夕食のテーブルは、明らかにこのシンポジウムに参加している人々ばかりであった。ワシは食事を噛みしめながら、彼らの話に耳を傾けた。

千葉のデザイン関係の仕事をしている2人連れ、東京から参加した、税務署の職員2名、群馬からやってきた受験生、金沢からきた女子高生達、そしてワシ。顔ぶれも年齢も多種多様であった。

「マカビーってたっけ、あれの話も今一つ突っ込んだもんじゃなかったね」

あの台湾から来た、江っていう博士、

あの話は眠くなった」

「俺なんかぐーぐー寝ちゃったよ」

「あしただっけ？」 矢追さんの話はずっと、かれらのUFO談義を聞きつつ、少々疲労したワシは、挨拶もそこそこに寝室へ退却していった。

2日目の演題は、永延博士の「開洋丸が遭遇した巨大UFO」、コールマン少佐の「星間戦争SS開星・星間平和を望んで」、アジャジャ博士の「ソ連におけるUFO事件」、矢追氏の「いま地球維新前夜！」という演題と、ジョイント・セッションによる質疑応答であった。

これも、サマリイは別記記事を参照していただくとして、特に印象に残った事例をあげてみよう。

永延博士の「開洋丸事件」は、日経サイエンスにも紹介された事件である。

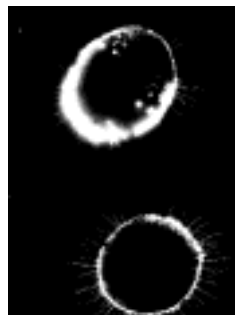
これは、84年12月18日に、南極大陸とウルフアイの間で遭遇したUFOの観測報告である。

目撃者が科学者だったこと、複数の人間とレーダーで確認されたこと、測距に秀でた船員の報告もあること等、信頼性の高い事件のひとつである。

ワシがもっとも興味を引かれたのは、アジャジャ博士の紹介した、ソ連のUFOへ対する研究のアプローチである。

じつにさまざまな仮説と、それを証拠付ける努力が行われているようじゃ。

また、アジャジャ博士からも興味深い話を聴講することができた。いわゆる「思考の物質化」じゃという！



キルリアン写真の例
これは、イチゴのオーラを撮影したもの

諸君は、キルリアン写真というものをご存知じやろう。生体のオーラを撮影するという装置であり、高周波発信器とコロナ放電素子を利用した写真撮影器である。

これらの装置は、思考や精神、魂というものが、何らかのエネルギーであるという観点から作られておる。

エネルギーすなわち物質というわけで、精神や魂というものが、物質的実在のものであるという発表じゃった。



精神開発も、厳しい修行が必要で無くなる可能性もある。

もし、この通り、精神が物質であるならば、あるいは、物質と何らかのつながりがあるならば、実に色々な心霊現象、超能力について、我々は物理法則を適用する事ができるのである！

そうすると、その運動方程式が立てられれば……

これはすでに魔法と同じである！そこには歴然とした因果関係と力関係があり、結果が予測できる。

「体をデザインする」というキャッチコピーがあつたが、これだと「精神をデザインする」、「運命をデザインする」という事も可能である！

そして、これこそ、先人達の築いた、解脱への修行プログラムなのではないか……

この「物質としての思考」とUFOの関係は、アジャジャ博士にとつては、単なるUFO現象の原因の一つであつたが、ワシにとつてはまさに瓢箪からコマに近しい指摘内容であつた。

また、矢追氏の講演は、エコロジイの立場から考えた地球環境と人間のあり方

宇宙とUFO・国際シンポジウムin羽咋

宇宙とUFO・国際シンポジウムin羽咋

についての発表であった。この考えの契機として、氏はUFOを扱っているのじゃという。ところで、昔ワシが第一次石油ショックと公害問題を知った時、そういう環境を生き抜くために、ワシは対策を考えたことがあった。すなわち、石油や電気にたよらない、最低限のエネルギーを自ら作り出せなければならぬ。飲み水の浄化方法と、穀物の栽培方法を理解しなくてはならない。穀物について、種子を長期保存する工夫を行い、種を維持しなくてはならない。病気について、その症例と予防法を理解しておく必要がある。

矢追氏の講演では、この点が実に簡潔に表現されていた。

「自分だけは生き残るにはどうすればよいのか」

「うーむ、まさに我が意を得たりといった講演内容であった。氏の言わんとする所は、結局、

「人任せに環境問題を考えてもダメである。自分の心の奥底から、この環境を生きた抜こうと考えたとき、自分が何をすれば良いか、自ずと分かってくるはずだ。」

という訳である。UFOは確かに大問題かもしれないが、それを考えることは、外からみた今の地球の状況を考えるに等しいということじゃ。

これはエゴイズムとは少し違うと思う。種としての存続問題なのである。

確かに、短期的にエゴを働かせれば戦争・略奪になるであろう。しかし、もっと長期の、人類という種の存続、地球生体系の存続を考えた場合、盲目的博愛主義が有利とはとても思えない。

ここ、羽咋までやってきて、ワシは色々な意見、主張に触れる事ができた。無批判にこれらの意見を受け入れるのは科学的方法論に反するが、意見に耳を貸さないのは、科学者としての倫理に反する行為である。

もともと、マッドサイエンスを標榜するワシが、科学の倫理云々言うのはおこがましいが、事実はそうなのである。まづとうな科学者の諸君、この点をよく理解してくれ給え。



UFO展示会場入口
シボジムはこの4階で行われた

話が少しそれたが、こうして大興奮へワシにとつての2日目のプログラムは終了した。

宿に戻ってみると、シンポジウムを核にした共通の話題があるせいじゃろうか、それそれが互いに互いの参加目的に興味を抱き始めた。

そこで、千葉から参加したデザイン関係の人がまとめ役となつて、それぞれの出身地や、シンポジウム参加の動機、UFOに関する意見などの自己紹介などを披露したわけじゃ。

例えば、東京から参加した税務署職員等は、色々とUFO以外の体験談などをしゃべつておつた。

面白かつたのは、とある「運命鑑定士」の税務調査をしたときの話じゃつた。

その話の内容はこうじゃ。

多摩地区あたりに、人生相談、運命鑑

定をするという人物がいるという。その人物はたいへん人嫌いで、一日に会う人間は数名に決めているそうじゃ。しかし、その人物の「運命鑑定」(たつたと思つたが)の能力はズバ抜けて優れており、このため、全国からお礼のお金を送られてくるのじゃという。

しかも、その額がハンパじゃない。このため、不審に思つた国税局が調査に彼らを派遣したのじゃという。

さすがに人嫌いのかの人物も、役人がきたというので、しぶしぶ面会に応じたらしい。

しかし、彼らが驚いたのは、何もしゃべらないうちから、当の人物が、ここへ来た目的やらなにやら、どんどんしゃべつていき、それが総て当たつていく。

こうして、現在のいかなる常識・知識にも当てはまらない現象を目の当たりにした彼らは、「世の中にはまだ分かつていないことが沢山ある」と感銘をうけたのじゃという。

また、群馬から来た受験生は、熱心にUFOの仕組みや飛行法について質問していた。主に相手をしていただけなのは千葉の人じゃつたが、ワシもときたま返答す



このシボジムを企画した羽咋市役所
常々疑問なのじゃが、どうして地方の公共施設はやたらと立派なのじゃろう？
大月のなんかみすばらしいぞ。
(だからといって大月が都会という訳はない)

る。不確定性原理やら反物質の話になったころは、ほとんど千葉の人とワシとでなから話を展開していたような気がする。そうして話題も一段落したあと、有志でもやや話をしていると、かの受験生が、「さっきの話の内容(量子力学)など、ああいった事を学ぶには、やはり大学に進んだ方がいいんじゃないか?」といううな質問をする。

結局、ワシは、「量子力学は、大学で学ぶことにしたことはないが、結局、UFO問題を含め、こういうことは教えてもらおうのではない、自らが考え、学んで行くのだ。だれも真実を教えてくれる訳ではないし、それを本当に知っている訳でもない。」という旨の話をしてお茶をにごしておいたが、しかし、そんな事ぐらい自分で考えるワシはいい。その受験生が、お礼にと思ったのか、「これ、面白いですよ」とそとと渡してくれたのが・・・太陽の法(幸福の科学)という本じゃった!しかし・・・いや、なんというか・



まあ、そんなこんなで色々あったが、最終日のワシたちは、シンポジウム会場で記念写真を撮影したり、あてもなく空を眺めたり、ワシなどは、月の石の展示があるという、UFO展示会場へ足を運んでみた。UFO展はほとんど写真と解説パネルで出来ているもので、高校の学園祭(事実地元高校の展示品もあった。UFO未来基地じゃったかな?)レベルのものが多

かった。もつとも、ワシは売りの一つである「月の石」はどんなもんかと、気ばかりが先走って、あまりパネルもしみじみとは見なかったのじゃが。その「月の石」は、アクリルと思われる樹脂に半分固められており、黒く磨き上げた1面が上部に露出しているのみであった。これは、かつての「大阪万博」のときに展示されたものと同じ物だったようにじや。(高天原研究所見解)2001年よりしく、おそろおそろ人差し指を触れたワシではあったが、しかし、別段何の啓示も受けたようには感じなかった。本当ならばもつとじつくり愛でたかつたのじゃが、脇に陰湿な雰囲気のカードマンが控えておつたので、名残を惜しみつつも出口へ向かったワシじゃった。



千里浜海岸で、潮風を受けながら、地球のゆく末を案じる我ら。一時の熱情にかられた行動でなく、人生の哲学に昇華されるのを望む。

その他、UFOの飛行音というテープもあって、これも聞いてみたのじゃが、なんととはなしに不快感のある音であつた。(ジャギーと、耳障りな音が基調で、しかも「うなり」が見受けられる。)シンポジウムも終わり、宿で知り合っ

た我々は、日本海に面した千里浜海岸に赴いた。波間に光る冬の陽光をぼんやり眺めつつ話す会話は、シンポジウムで提起されたいまの地球の抱えている問題点であつた。確かに、このまま行けば、いつれこの文明は破綻する。しかし、わかつちやいるけどやめられないのが人間の業。石油を燃やすのをやめれば、電気を使うのをやめれば、粗食でもかまわなければ、人口を減らせれば、確かに問題は解消もしくは先送りするじやろう。しかし、誰がそれをやるのか。誰が貧乏くじを引くのか。そんな問いかけに答えられるものはいまい。では、個人の意識改革か?これとて限界がある。意識改革は方法論であつて結論ではない。ワシは夢想する。いつの日か、個人の意識が互いに融合し、全ての人格が、超人格の成分となる事を。ここで、人格は超人格を構成するホログラムのドットとなり、個人は全体を構成し、全体は個人のなかに投影される。生も死も全ての人々の共有意識となつたとき、初めて、人類は一段、進化の階段を上るのではないじやろうか。次の進化は、個人の内面、精神世界で起こるはずじゃ。

・・・などと、柄にもなくセンチメンタルになったワシらは、照れ隠しに、車で千里浜をクルージングしてしもうた。「ええーい、大空のバツキヤローツ!」うーん、地球環境もたまつたもんじやないのう!



宇宙とUFO・国際シンポジウムin羽咋